

育に関心がない様子でした。

**武田** たとえば、普段自分が見ている「Twitterの雰囲気からすると、安倍政権は5、6回つぶれているはずなんですよ。選挙で勝てるはずがないし、投票率も90%は超えているはず。なのに実際には投票率は50%を切っていて、政権も維持されている。

これがSNSの恐ろしいところです。自分たちが身を置いているのはどういう環境にあるのかを意識して、そこからどう違うゾーンにアクセスし、1人でも2人でも新たに考えてもらえらるかが重要。「まだ安倍かよ」って自分たちの周辺だけで言っている限り、安倍政権は続くことになるんですから。

**田中** クリテイカルな活動をしている人たちも、結局はいつものメンバーといつもの言葉でしゃべって、「やっぱそうだよな」って合意しあっ

て気持ちよく終わってしまったっている。簡単には共感してもらえないところにどう切り込んでいくなかが問われていますね。

**武田** 自分とは違う感覚の人たちがどう考えているのか、新聞で言えば読売とか産経がどう書いているかは、常に意識して確認しておかなくては、と常々思っています。

フェミニズムが怖がられるのはなぜ？

**武田** 編集者時代、北原みのりさんと上野千鶴子さんと信田さよ子さんの3人が登壇されたイベントのサポートに出向いたことがあったのですが、みんなで赤い服を着てこようと呼びかけられていた<sup>\*1</sup>。その光景を後ろから見ていて、ここには入れない、と思ってしまったんですね。

ずっと、そうではない音楽を聴いてきた。社会に厳しい視線を向けるのって普通でしょ、と思っているの、なんでそんなに黙っているの、と見てしまふ。これだけ、自由であることを制限する政策が重なっているのに、まだ怒らないのか、とこっちの怒りが増長してしまうんです。だからこそ今、フェミニズムの中で勃興している怒りの表明に打たれることが多いです、その流れの中で自分も物申していかなければと思っています。

**田中** 課題が多すぎて、なかなか話が尽きませんね。武田さんのおっしゃった「筋肉」や「手癖」といった習慣化されたことに切り目を入れていくために、私たち1人ひとりに何ができるのか。これからも考え、実践していきたいと思えます。

【注】

\*1 ここでとりあげているイベントは2013年11月12日に行われた青山ブックセンター『毒婦たち 東電OJと木嶋佳苗のあいだ』刊行記念のトークイベントで、参加者全員に赤い服を着てこようと呼びかけられたのではなく、登壇者の3人のみドレスコードが赤となっていました。間違いを訂正し、深くお詫びいたします。